

声に出して読みましょう。

### 月夜とめがね

おがわみめい  
小川未明

町も、野も、いたるところ、緑の葉につつまれているころでありました。

おだやかな、月のいい晩のことです。しずかな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただひとり、窓の下にすわって、針しごをしてみました。

ランプの火が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの火に、いくたびも、すかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、ほそい糸をよったりしていました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあた

たかな水の中に、木立も、家も、丘も、みんなひたされたようで

あります。おばあさんは、こうしてしごとをしながら、自分のわ

かいじぶんのことや、また、遠方のしんせきのことや、はなれてく

らしている孫娘のことなどを、空想していたのであります。

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上できざ

んでいる音がするばかりで、あたりはしんとしずまっています。

ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかな巷の方から、な

にか物売りの声や、また、汽車の行く音のような、かすかななど

ろきがきこえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのかすら、思いだ

せないように、ぼんやりとして、ゆめを

みるようにおだやかな気持ちですわって

いました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさん  
 は、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。  
 いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。きっとこれ  
 は、風かぜの音おとだろうと思おもいました。風かぜは、こうして、あてもなく  
 野原のほらや、町まちを通とおるのであります。

すると、こんどは、すぐ窓まどの下したに、小ちいさな足音あしおとがしました。おば  
 あさんは、いつもにじず、それそれをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれかよぶのであります。

おばあさんは、さいしよは、自分じぶんの耳みみのせいせいではないかと思おもいま  
 した。そして、手てを動うごかすのをやめていました。

「おばあさん、窓まどをあけてください。」と、また、だれかいいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、だれが、そういうのだらうと思<sup>おも</sup>って、立<sup>た</sup>って、窓<sup>まど</sup>の戸<sup>と</sup>をあけました。外<sup>そと</sup>は、青白<sup>あおしろ</sup>い月の光<sup>ひかり</sup>が、あたりをひるまのよ<sup>よ</sup>うに、明<sup>あか</sup>るく照<sup>てら</sup>らしているのであります。

まどの下<sup>した</sup>には、背<sup>せ</sup>のあまり高<sup>たか</sup>くない男<sup>おとこ</sup>が立<sup>た</sup>って、上<sup>うえ</sup>をむいていました。男<sup>おとこ</sup>は、黒<sup>くろ</sup>いめがねを<sup>か</sup>けて、ひげが<sup>あ</sup>りました。

「私<sup>わたし</sup>はおまえさん<sup>し</sup>を<sup>し</sup>知らないが、だれですか。」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見<sup>み</sup>しらない男<sup>おとこ</sup>の顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>て、この人<sup>ひと</sup>はどこか家<sup>いえ</sup>をまちが<sup>お</sup>えてたずねてきたのではないかと思<sup>おも</sup>いました。

「私<sup>わたし</sup>は、めがね<sup>う</sup>売り<sup>う</sup>です。いろい<sup>ろ</sup>ろなめがね<sup>を</sup>たくさん持<sup>も</sup>っています。この町<sup>まち</sup>へは、はじめ<sup>き</sup>めて<sup>もち</sup>ですが、じつに気持<sup>きもち</sup>のいいきれいな町<sup>まち</sup>です。今夜<sup>こんや</sup>は月<sup>つき</sup>がいいから、こうして売<sup>う</sup>

つて歩<sup>ある</sup>くのです。」と、その男<sup>おとこ</sup>はいいま<sup>した</sup>。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、目がかすんで、よく針のめどに、糸が通らないでこまっていたやさきでありましたから、

「私の目にあうような、よく見えるめがねはありますかい。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきました。そして、そのなかから、おばあさんにむくようなめがねをよっていましたが、やがて、一つのべっこうぶちの大きなめがねを取り出して、これを、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしました。

「これなら、なんでもよく見えることうけあいです。」と、男はいました。

窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけて

くろずんで咲いて、におっていました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、このめがねをかけてみました。そして、あちらの

目めざまし時計どけいの数字すうじや、暦こよみの字じなどを読よんでみましたが、一字いちじ、

一字いちじ

がはつきりとわかるのでした。それは、ちょうど、いく

じゅうねんまえ

むすめ

十年前の娘むすめのじぶんには、おそらく、こんなになんでも、はっ

め

きりと目にうつったのであろうと、おばあさんに思おもわれたほどで

す。

おばあさんは、大おおよろこびでありました。

「あ、これをおくれ。」とって、さっそく、おばあさんは、このめが

ねかを買かいました。

おばあさんが、お金かねをわたすと、黒くろいめがねをかけた、ひげのあ

るめがねう売おとこりの男おとこは、たち去さってしまいました。男おとこのすがたが

見みえなくなっくさばなたときには、草花くさばなだけ

が、やはりもとのように、夜よるの空くうき気の

中なかにおなかっていました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、窓をしめて、また、もとのところにすわりました。

こんどはらくらくと針のめどに糸を通すことができました。お

ばあさんは、めがねをかけたリ、はずしたりしました。ちょうど子

どものようにめずらしくて、いろいろにしてみましたのと、もう

一つは、ふだんかけつけないのに、きゆうにめがねをかけて、よう

すがかわったからでありました。

おばあさんは、かけていためがねを、またはずしました。それを

たなの上の目ざまし時計のそばにのせて、もう時刻もだいぶお

そいからやすもうと、しごとをかたづけにかかりました。

このとき、また外の戸をトン、トンとたたくものがありました。

おばあさんは耳をかたむけました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「なんとというふしぎな晩ばんだろう。また、だれかきたようだ。もう、  
 こんなに……。」と、おばあさんはいって、時計とけいを見ますと、外そとは  
 つき ひかり あ  
 月の光つきに明あかるいけれど、時刻じこくはもうだいぶんふけていました。

おばあさんは立ちあがって、入り口いりぐちの方ほうに行いきました。小ちいさな  
 手てでたたくとみえて、トン、トンというかわいらしい音おとがしていた  
 のであります。

「こんなにおそくなってから……。」と、おばあさんは口くちのうちで  
 いいながら戸とをあけて見みました。するとそこには、十二三じゅうにさんの美うつく  
 しい女おんなの子こが目めをうるませて立たっていました。

「どこの子こかしらないが、どうしてこんなにおそくたずねてきま  
 した?。」と、おばあさんはいぶかりながら問といました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒



「わたしは、町の香水製造場にやとわれています。毎日、毎日、

白ばらの花からとった香水をびんにつめています。そして、夜、

おそく家に帰ります。今夜も働いて、ひとりぶらぶら月がいい

ので歩いてきますと、石につまずいて、指をこんなにきずつけて

しまいました。私は、いたくて、いたくてがまんができないので

す。血が出てとまりません。もう、どの家もみんなねむってしまい

ました。この家の前を通ると、まだおばあさんが起きておいでな

さいます。私は、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いいかた

だということを知っています。それでつい、戸をたたく気になった

のであります。」と、髪の毛の長い、美しい少女はいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、いい香水こうすいのにおいが、少女しょうじょのからだにしみてい  
るとみえて、こうして話はなしているあいだに、ぶんぶんはなと鼻はなにくる  
のを感じかんました。

「そんなら、おまえは、私わたしを知しっているのですか。」と、おばあさ  
んはたずねました。

「私わたしは、この家の前まえをこれまでたびたび通とおって、おばあさんが、  
窓まどの下で針はりしごをなさっているのを見みて知しっています。」と、

少女しょうじょは答こたえました。

「まあ、それはいい子こだ。どれ、そのけがをした指ゆびを、私わたしに見みせな  
さい。なにか薬くすりをつけてあげよう。」と、おばあさんはいいました。

そして、少女をランプの近くまでつれてきました。少女はかわいらしい指を出して見せました。すると、まっ白な指から赤い血が流れていました。

「あ、かわいそうに、石ですりむいて切ったのだろう。」とおばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。

「さっきのめがねはどこへいった。」とおばあさんは、たなの上をさがしました。めがねは、目ざまし時計のそばにあったので、さっそく、それをかけて、よく少女のきず口を、見てやろうと思いましたが、

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

おばあさんは、めがねをかけて、この美しい、たびたび自分の

家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようとしました。する

と、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなく、

きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんなお

だやかな月夜の晩には、よくこちようが人間にばけて、夜おそく

まで起きている家を、たずねることがあるものだという話を思

いしました。そのこちようは足をいためていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいい

ました。そして、おばあさんはさきに立って、戸口から出てうらの

花園の方へとまわりました。少女はだまって、おばあさんのあ

とについて行きました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

花園には、いろいろの花が、いまをさかりと咲いていました。ひ

るまは、そこに、ちようや、みつばちが集まっています、にぎやかであ

りましたけれど、いまは、葉かげでたのしいゆめをみながらやす

んでいるとみえて、まったくしずかでした。ただ水のように月の

青白い光が流れていました。あちらのかきねには、白い野ばら

の花が、こんもりとかたまって、雪のように咲いています。

「娘はどこへ行った？」と、おばあさんは、ふいに、立ちどまって

ふりむきました。あとからついてきた少女は、いつのまにか、ど

こへすがたを消したものが、足音もなく見えなくなってしまうま

した。

「みんなおやすみ、どれ私もねよう。」と、おばあさんは行って、

家の中へは行って行きました。

ほんとうに、いい月夜でした。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒